

第44回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

あのお兄ちゃん、何してたん？

加古川市立氷丘中学校 2年 藤原 彩羽

私がまだ小学校低学年の頃、お母さんと弟と3人で商店街を歩いていた時のことです。

あるお店の前で、「あーあー」と叫びながら、両手を広げてくるくると回っているお兄さんがいました。私と弟は、「何してるんだろう？」と不思議に思いながら、そのお兄さんをじーっと見つめました。

お兄さんが見えなくなった後、私はお母さんに聞きました。「あのお兄ちゃん、おもしろかったなあ。何してたん？」お母さんは、「ほんまやなあ、なんか楽しいことあったのかなあ。」と言いました。

その時のことを、私ははっきりとは覚えていませんが、子どもながらに「ちょっと違う何か」を感じ取っていたのかもしれません。

それから何年も経って、最近お母さんから聞いたのですが、あの出来事の後、お兄さんのことをずっと考えていたそうです。子どもに「何してたん？」と聞かれたとき、どう答えるのがいいのか。「個性」といったきれいごとではなく、隔たりなく、わかりやすく伝える方法を模索していた、と。

そんなある日、お母さんは知り合いから「B型就労支援施設で働いてみないか」と声をかけられました。その頃、弟はまだ小さく、仕事を始めるには不安も多かったそうです。でも、あの商店街のお兄さんの姿がふと頭に浮かび、思い切って働いてみることにしたと言っていました。

お母さんの職場では、利用者さんと一緒にハンドメイド作品を作り、併設の雑貨店やイベントで販売しています。

ある日、施設長さんがこんな話をされたそうです。「ここにはいろんな子がいる。例えばAくんは絵が得意。絵の上手さが一番評価される世界にいたら、Aくんはトップクラス。私たちはその世界で生きるには、すごく努力しないといけない。結局、評価される物差しが違うだけ。私たちはたまたま今の物差しの世界にいるだけなんやで。」

何をもって「健常」とし、何をもって「障がい」とするのか。この話を聞いた時、お母さんは深く考えさせられたと私に教えてくれました。

私もときどき、お母さんの職場に遊びに行きます。そこでは裁縫が得意な人

や、レジンでかわいいアクセサリーを作る人がいて、みんな優しくてにこにこしながらお話してくれます。最初は誰が利用者さんで、誰がスタッフなのかもわからなかったほどです。

私は「障がい」と聞くと、何か目に見える違いをイメージしてしまっていたことに気がつきました。

ある日私はお母さんに、あの商店街で出会ったお兄さんのことを思い出しながら、こう尋ねました。「今やったら、あのお兄ちゃん何してたん？って聞いたら、なんて答える？」

お母さんはしばらく考えて、にこにこ話してくれました。「赤ちゃんが泣くことでいろんな感情を伝えるように、人それぞれ、感情を伝える方法は違うんだよ。上手に言葉を使える人ばかりじゃないやろ？彩羽も、自分の気持ちを言葉にするのが難しい時ってあるやん？だからきっと、あのお兄ちゃんも何か伝えたかったんやと思う。でもな、顔がニコニコしてたから、楽しいこと、嬉しいことやったんやろなあ。ちょうどプラモデル屋さんの前やったし、かつこいのを見つけたんかもしれんなあ。」

私はこの話を、いつか自分の子どもができた時に伝えたいと思っています。そして、言葉のひとつひとつに敏感でいたいです。